
虹の見える場所

杉岡 龍治 B4tBwTdtrQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の見える場所

【Nコード】

N9421Y

【作者名】

杉岡 龍治 B4tBWtdtrQ

【あらすじ】

クラスメイトが入院した。見舞いに訪れた病室から虹が見えた。

通う高校のクラスメイトである山田香花が突然入院したのは、高校生活最後の学年になり、クラス替えて変わった同級生の顔ぶれに、やっと慣れた5月の中頃の事だった。

新学年早々、調子が悪そうにしていた事もあって、本人も風邪を引いたと言っていた。

山田香花とは小学校からずっと同じ学校、同じクラスであり、その間に一度も休む事も無く、皆勤賞の常連であると言う事を知っている僕からすれば珍しい事もあるものだと思い、山田香花にそう言う時、彼女は調子の悪そうな顔でプンス力怒りながら、か弱い病弱な黒髪の乙女に酷い事を言っていると抗議された。

「上木君はデリバリーが無いわね。そんなんだから彼女も出来ないのよ。この道程野郎」

たしかに黒く長い髪は、色白の肌を引き立たせて外見だけなら誰しも振り返る存在だが、その言動は変わり者で有名だった。

「配達するにも、僕に前には道はないのか？迷走する宅配業だな。そもそも方向音痴の俺には向いていない。東京に空はきつとないんだよ。というか正確に言うならばそれはきつとデリカシー」

「英語は苦手なのよ。知つての通り得意なのは保健体育」

「すでにデリカシーが英語という枠組みで良いのか解らないけど、山田が保健体育が得意かどうかは知らないぞ。そもそも男子と女子で授業は別れているだろう」

「射精とか、勃起とか教科書の中身は完璧よ。オギノ式で危険日と安全日の計算も完璧なのだけど、きちんと基礎体温を測っているその成果を発表する機会はないのが残念」

「とりあえず、それが保健体育の全てではないと言う事だけは言っておく。ちなみに前のテストは何点だったんだ？」

「92点。いくつか興味の無い事の問題が出てたから」

「ちなみに僕は100点だ。テストが帰ってきた時から僕のあだ名はエロ王という悲しいあだ名が付いた」

「むしろ名誉ね。二代目エロ王に私はなる!!」

「お前の未来はそれでいいのか？」

そんな馬鹿な話をした後から、ポツポツと学校を休む様になり、登校してきても途中で帰るといつ日々が続いた。

そんな中で、担任の天照麻千子先生から朝礼で山田香花が入院したという事を知らされたのだった。

「と言うわけで、お見舞いよろしくね、上木君」

山田香花が入院してからしばらく経ち、僕は麻千子先生に呼び出されて職員室にいた。

「どういうわけか解りませんが、まあ、見舞いには行こうと思っていたので了解しました」

「悪性リンパ腫」

「は？」

突然出た言葉に僕は、一瞬世界が止まった様に感じた。

言葉の意味は解らないわけでもなく、話の流れからすれば、それは山田香花の病名だろう。

「山田さんの病名よ。本人も知っているし、行ったら解ると思うけども、一応、知っていた方が良いでしょう？」

「……正直、引きますね。知り合いがその病気になったと知らされると。どういう顔で合えばいいのか解りません」

「普通でいいんじゃない？病気はたしかに大変なものだけど、誰の所為とか、本人の所為とか言う訳じゃないし、いつか自分もなるかも知れないだし、気を使われる方が困るんじゃないかしら？」

「そんなもんですかね？」

「そんなものよ。人生なんてそんな簡単に逝くもんじゃないわよ。私も若い頃は……」

それから二時間に渡って、天照麻千子・32歳　その波瀾万丈の人生を聴かされたのだが、それはまた別の話。

そして次の日曜日、僕は山田香花を見舞う事にしたのだった。

山田香花が入院している病室の窓から外を見ると、雨上がりの空には薄く虹が架かっていた。

その向こうに広がる、どんよりとした灰色の雲とは対照的に、七色の光りが美しいアーチを描いている。

「虹つて、きれいよね」

二回目の抗ガン剤治療の点滴を三日前に終えたと言う山田香花は、ベッドに横たわったまま倦怠感と疲労感に包まれた表情を和らげてそう言った。

抗ガン剤の副作用である吐き気を止める錠剤を飲んでいるそうだけど、胸が悪く食欲がないと言いながら、僕が持っていたバナラのカップアイスクリームを僕の分まで食べたばかりであった。

「ああ、小雨だけど、天気雨が降っていたからな」

僕は外を見ながら、アイスのかわりに渡された親戚のおばさんが持ってきたというきんぴらゴボウを食べていた。

面会に訪れた僕は、初めて聞いた血液内科という病棟の空気と、自分の病気の事も知らされると言う山田香花を目の前にして、思ったように喋る事は出来なかった。

「なぜ、僕はきんぴらゴボウを食べている？」

「なんなら煮付けと肉じゃがもあるけれど？」

「見舞った先で家庭的な料理を食べている理由が分からない」

「ほら、わたし食事制限とか一切無いから、親戚のおばさんとかいろいろ持ってきてくれるんだけど、残っちゃうのよね」

「ちよつとくらいの汚れ物ならば、残さずに全部食べてやるって、僕はミスチルか」

本当は大丈夫か？元気にしてたと言おうかと思ったが、すでに入院までしている状態なので問題外だったし、何よりも、腰の辺りまであった長い黒髪をバツサリ切り落とした坊主頭が目のやり場に困った。

それに気が付いたのか、病院の売店で買ったというニットキャップを被り、どうせ抜けちゃうから切っちゃったのよと彼女は少し恥ずかしそうに笑って言うのだった。

短く刈った髪すらも、今ではかなり抜け落ちていて、頭皮が露わになっているのが痛々しい。

「剃毛プレイをこの歳ですとは思わなかったわ」

「プレイじゃねえよ」

学校を休んでいる間、一週間経っても、二週間経っても病状は回復することなかったので、やっと近所の病院に行ったそうだった。

その病院では最初に風邪と診断されたそうだった。

病状が回復しないので、通院を繰り返していたが、最終的には原因が分からないから大きい病院に行ってくれと言われ、そしていくつもの病院を周り、検査などを繰り返し返したあげく、ようやく入院したのが今いる病院だったそうだった。

「だけど、虹なんかを見て感動できる私も末期よね。悪性リンパ腫にならなかったら、きっと虹が出ている事にも気が付かない日々を送っていたように思うの。虹がわたしに気が付くだろうけど」

「お前は何様なんだよ？まあ、末期とか言うなよ。言葉に困るから」

「ごめんごめん。余命二ヶ月ってところね」

「そ、それは……医者に言われたの？」

「『余命二ヶ月の花嫁』とか、テレビとか映画とか、だいたい二ヶ月じゃない？」

「自称か！？テレビとかは、哀しい話が好きなんだよ！！お前が余命二ヶ月というわけじゃないだろう？」

「そう言えば、悪性リンパ腫って抗ガン剤がけっこう効くって話よ。だから明日、明後日にハイさよならって言う訳じゃないみたいね。だけど再発もしやすいそうだから、五年先はわからないけどね。あ、そうだ。生体検査でリンパ線の組織を取る手術したときの疵痕見る？けっこう凄いのよ」

僕が答える前に、彼女はパジャマの上着を捲った。

彼女の白い肌には縦に30センチ近い大きな手術跡が残っていた。「乙女の柔肌なんて事って言う話よね。何でも腫瘍がお腹の奥深くにあったもんだから、いちど十二指腸を全部出したとか言う話よ。ほんとう無茶するわよね」

目を背けたいのが本心だった。

クラスメイト女子のパジャマの下と言えば魅力的な話だけれども、そこにあるのは大きな疵であり、見ちゃ行けないような気がしたのだけど、彼女が見せている以上、目をそらすのは失礼な気がしたのだ。

「しかし、十二指腸なんかを引っ張り出したら元に戻すのは大変だろうな。絡まりそうだ」

「ちよつと、余っちゃったりしてね」

「余ったら、大問題だよ」

「このあとスタッフがおいしく頂きましたとかテロップが出たりしてね」

「何の番組だよ。放送できねえよ」

話も尽き、僕が帰る事を告げると、彼女が玄関まで送るというので病室を出た。

すると看護師の人たちがエレベータの前に集まっている光景に出くわしたのだ。

看護師の皆さんは手を合わせ目を伏せていた。

「誰か亡くなったのね。ここはそう言う人たちばかりの病棟だから」

彼女はそう言って手を合わせる。

「ナム」

「ナム」

「……私も最初はね、風邪だと思っていたのよ。だけど二週間経っても熱が下らないから近所の病院に行ったの。私は基本、風邪

くらいじゃ病院に行かないで気力で治す方針だったんだけど、さすがに二週間も熱が下がらなかったら風邪じゃないんじゃないかと思っ
て。寝汗も酷かったし。溺れるかと思っ
たわ」

「溺れねえよ。と言うか、さっさと病院に行けよ」

「でも、病院では、最初に風邪だって言われたのよ。だから風邪薬をもらって家で寝てただけど、熱冷ましが効いているときだけ熱が下がって、逆に下がりすぎて具合が悪くなって死ぬかと思った。安静にしてたら治ったんだけど。私は我慢強いから」

「死ぬかと思う前に救急車呼べよ」

「それでね、いろんな病院を転々とさせられて、今の病院で判明したというわけ」

「そうか……大変だったな」

「だけど、病名が解ってからネットで『高熱』『寝汗』で検索したら、簡単に『悪性リンパ腫』って出てきたんだけど、最初の病院はヤブ医者よね」

「訴えられるレベルだな……」

玄関先で彼女に見送られながら病院を出ると、外は小雨も止み、夏真っ盛りの青い空が広がっている。

そこに彼女と病室で見た虹がまだかかっていた。

来年の夏も。その先もずっと彼女と共に虹を見上げることが出来たらと思うのだけど、今はそれを言葉にする事は無く、ただ彼女が治療を終えて退院し、普通の生活の戻れた時に伝えようと思う。

「お父さん、起きて！！遅刻するわよ」

娘に起こされてベッドを出ると寝室にある仏壇に手を合わせる。

山田香花はあれから10年生き、その間に僕と結婚して娘の遥香が生まれた。

その遥香も今年から高校生になり、元氣よく学校に通っている。

母親の記憶はほとんど無いのだけど、小さい頃に母親の若い頃の
写真を見てから伸ばしはじめた髪も腰の辺りで揃えている。

朝食を取るための居間のテーブルに着くと、すでに制服に着替え
家を出る仕度をした遥香が薬を水で飲んでいた。

「どうした？」

「なんか風邪をひいたみたい。でも大丈夫。風邪ぐらいなら気合
いで治すから」

「いや、薬飲んでるだろ」

「さすがに二週間も続くとね。いけない！！もう、行かないと」
声をかける間もなく、遥香は家を出て行った。

私は少し不安になりながら、娘の用意した朝食を食べた。

居間から外を見ると昨夜に降っていた雨は止み、その空にはいつ
か香花と共に見たものとは違う虹が架かっているのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9421y/>

虹の見える場所

2011年11月28日01時45分発行